

こ う ざ ン は つ で ん し ょ

鉱山で発電所をつくる

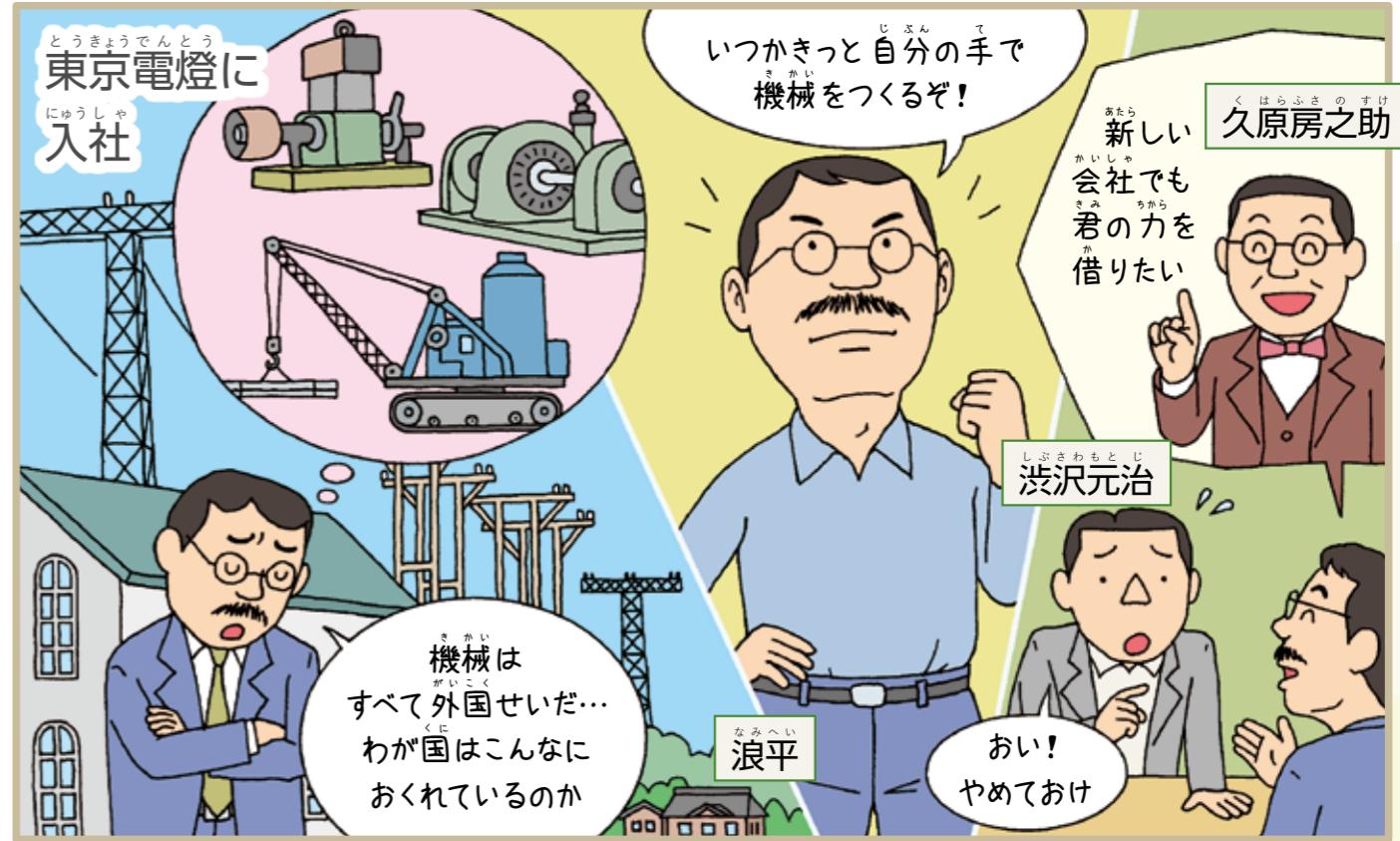
希望の大学に入学した浪平でしたが、受験が終わって安心したのか、1年目は活動写真(えい画)や旅行などしゅみにむ中になって進級できませんでした。必死に働いて仕送りをする兄におこられた浪平は、気持ちを入れかえて勉強に集中。そして26才のとき、ゆうしゅうな成せきで大学を卒業し、秋田県にある藤田組小坂鉱山で電気ぎしとして働きはじめました。浪平はここで人生を大きく変える出会いをします。それは小坂鉱山で所長をしていた久原房之助でした。久原は大学を出たばかりの浪平に、いきなり「発電所をつくってほしい」と言います。鉱山では、ほり出した銅を運んだり、たくさんの機械を動かしたりするため、大量の電気が必要なのです。

とつ然のことにおどろいた浪平でしたが、発電所をつくる場所選びからせっ計まで一人でやり上げ、なんとわずか2年で発電所を完成させました。
「電気こそ日本の近代化をすすめるのだ!」

浪平は発電所の建せつにやりがいを感じました。



反対をおし切り日立鉱山へ



1904年(明治37年)、浪平は小坂鉱山を辞めます。日本一の電力会社である東京電燈(今の東京電力)が、当時では日本最大の発電所をつくると知ったからです。

「日本最大の発電所づくりに参加したい」と考えた浪平は、31才で東京電燈に入社しました。すぐに大きな工事をまかされてよろこぶ浪平でしたが、そこで大きなショックを受けます。それは、工事げん場で使われている発電機などの機械がすべて外国せいだったからです。

「わが国の工業はこんなにおくれているのか」

げん実を目の当たりにした浪平は、「いつかかならず自分の手で機械をつくり、日本の發

てんにこうけんする」と心にちかいました。

ちょうどそのころ浪平は、久原から「茨城県の日立にある鉱山を買った。ぜひ君の力を借りたい」とさそわれます。大学時代の親友である渋沢元治(渋沢栄一のおい)からは「最新の仕事ができるめぐまれた地位を捨ててまで行くべきものなのか」と反対されたものの、浪平は東京電燈を辞めて日立の鉱山へ行くことを決めました。

教えて! とち介

★ 渋沢栄一と渋沢元治

渋沢元治は新一円万円札のしょうぞう画になっている渋沢栄一のおいだよ。東京帝国大学で浪平と出会ったんだ。大学卒業後は國家公務員として働いた後、東京帝国大学の教じゅ、名古屋帝国大学(今の名古屋大学)初代そう長になったよ。

